

二人称から三人称、そして一人称の死へ

—沖縄におけるエンディング・ツーリズムをめぐる—

塩月亮子

From the Second Person Death to the Third Person Death, and to the First Person Death

—On Ending Tourism in Okinawa—

Ryoko SHIOTSUKI

要旨：近年、死の自己決定権が重視されるようになると、自分がどこで死を迎え、どのように葬られ、どこで眠りたいのかを自ら考えることが必要と認識されるようになった。それに伴い、自分の出身地や住んでいる場所に関係なく、家族で楽しく旅行した所や自分の好きな土地、憧れている場所などで死後葬られたいと希望する人が現れるようになった。このような人々を対象に、生前から葬法や埋葬地、あるいは散骨地を決めるためのツアー、すなわちエンディング・ツアーが催されるようになった。憧れの地といえ、旅行先としてはもちろん、退職後に移住を希望する人も多いリゾート地がまず挙がってくるだろう。様々なしがらみなどから移住することは無理でも、死後にそこで眠りにつきたいという願望が、今やリゾート地へのエンディング・ツアーの人気を押し上げている。日本での著名なリゾート地のひとつに沖縄があるが、昨今、県外出身者で沖縄に憧れ、そこで永遠の眠りにつきたいと願う人々が沖縄でのエンディング・ツアーに参加し、海洋散骨の模擬葬を体験、あるいは見晴らしのよい海の見える埋葬地などを訪れている。これは、沖縄の観光が第二次世界大戦直後は慰霊観光という自分の親兄弟や親戚、あるいは友人といった「二人称の死」を扱うものであったものが、次第に自分とは関係ない他者、すなわち「三人称の死」を修学旅行での平和学習等で学ぶ観光に取って代わり、現在はまた新たに「一人称の死」、すなわち自分で己の死のあり方を考え選択する観光が、死生観の変化により出現したと捉えられる。つまり、沖縄の死をめぐる観光は、「二人称の死」から「三人称の死」へ、そして現在は「一人称の死」へと変化していると考えられるのである。

キーワード：沖縄、エンディング・ツーリズム、一人称の死、死生観、海洋散骨

はじめに

私たちの生活のなかの死をめぐる様相は、今日大きく変容しつつある。死の意味付けを模索するなか、エンディング・ノートをつけたり、入棺体験をしたりと、死の自己決定権や尊厳死を意識する人が増え始めた。葬儀や墓については、今やいわゆる「伝統的」なやり方だけではなく、散骨や樹木葬、さらには宇宙葬まで用意されている。一方、葬儀や墓は拡張するだけではなく、ロッカー式納骨堂や手元供養、あるいは墓じまいなど、簡素化・合理化も進んでいる。現在は自らの死のあり方を考える際の選択肢が増え、死の多様化・個人化が顕著となってきているのである。

このような状況のもと、最近では自分の出身地や住んでいる場所に関係なく、家族で楽しく旅行した所や自分の好きな土地、あるいは憧れている場所などで死後葬られたいと希望する人が現れるようになった。そして、このような人々を対象に、生前から葬法や埋葬地、あるいは散骨地を決めるためのツアー、すなわちエンディング・ツアー、あるいは終活ツアー⁽¹⁾とよばれる旅行が葬儀会社や旅行会社、クルーズ会社などにより盛んに催されるようになった。憧れの地といえ、旅行先としてはもちろん、退職後に移住を希望する人も多い風光明媚なリゾート地がまず挙がってくるだろう。様々な制約やしらがらみなどから移住することは無理でも、死後にそこで眠りにつきたいという願望が、今やリゾート地へのエンディング・ツアーの実現を後押ししている。

日本における代表的なリゾート地のひとつに、沖縄がある。沖縄は、今やハワイと同じかそれ以上の入域観光客数(2018年度は年間1,000万4,300人⁽²⁾)を誇る観光立県である。昨今、県外出身者で沖縄に憧れ、そこで永遠の眠りにつきたいと願う人々が沖縄でのエンディング・ツアーに参加し、海洋散骨の模擬葬を体験する、あるいは眺望のよい海の見える埋葬地などを訪れる、そしてその人の死後は遺族や友人たちが故人の希望を叶えるためにエンディング・ツアーをおこなうといった状況がみられる。これは、沖縄の死をめぐる観光が、第二次世界大戦直後は慰霊観光であったものが、次第に中学生や高校生を対象とした平和学習のための観光に代わり、現在は新たにエンディング・ツーリズム、すなわち自らの死のあり方を考え選択する観光へと変化してきたことを表している。

そこで、本稿では日本における著名なリゾート地のひとつである沖縄を事例に、そこでおこなわれているエンディング・ツアーという新たな観光の様相を明らかにする。その際、死を「一人称の死」(自分の死)、「二人称の死」(近親者の死)、「三人称の死」(他人の死)の3種類に分類したフランスの哲学者、V.ジャンケレヴィッチの概念⁽³⁾を用い、沖縄における死をめぐる観光の変化についての考察を試みる。

1. 戦後の沖縄観光の変遷

本章では、第二次世界大戦後から現在までの沖縄観光の変遷を、次の3つの時期に分けて述べる⁽⁴⁾。

①戦後(1945年)～本土復帰(1972年)

沖縄の観光が本格化したのは、第二次世界大戦以降のことである。それ以前は主に商人や役人、学者などが仕事関係で沖縄を訪れていたが、それ以外の者にとり、沖縄への旅はまだ一般化していなかった。しかし、第二次世界大戦中、沖縄では大規模な地上戦がありおびただしい戦死者が出たため、戦後(1945年)から慰霊訪問(墓参観光)が実施された。それは沖縄で戦死した身内や友人を弔う、いわゆる「二人称の死」の旅であり、1972年の本土復帰ごろまで続いた。また、本土復帰までは沖縄は米軍の占領下にあり、日本本土の人が訪沖するにはパスポートが必要だったことや、日本が豊かになるにつれ、沖縄での舶来品ショッピングが盛んになったことも挙げておきたい。

②本土復帰(1972)～1990年代

本土復帰後は、戦死者の関係者が高齢化するに従い慰霊訪問が減り、代わりに中高生の平和学習としてひめゆりの塔や平和の礎(平和祈念公園)などを回るといふ、知らない他者の死を悼む「三人称の死」の旅が徐々に増えていった。そして、死の見せ方も死者が何人だったか数字(抽象的な塊)のみで示すのではなく、個々人の人生がよりリアルに感じられるよう死者ひとりひとりの顔写真や遺品等を展示する方法へと変わっていった。平和学習のために戦跡など負の遺産を巡るツアーは、ダーク・ツーリズムの一種と捉えることもできる。

慰霊訪問が終息し始めた1970年代は、1975年に沖縄本島北部で開催された沖縄国際海洋博覧会(海洋博)を契機として沖縄が観光地として注目され始めた時期でもある。魔よけのシーサーが観光客にとりユニークで「かわいい」存在に変わっていったのも、海洋博の影響であった⁽⁵⁾。1977年からは団体包括割引運賃制度が開始され、各航空会社は本格的な沖縄キャンペーンをおこない、航空運賃の割引で沖縄へ観光に行きやすくなった。

1980年代は、第2次オイルショックや円高不況がありながらも、いわゆるリゾート法とよばれる総合保養地域整備法が1987年に施行された影響で、沖縄でもリゾート開発とリゾート観光がブームとなった。その結果、リゾートホテルが多数開業し、マリンスポーツが人気となり、観光客数が増加していった。

1990年代はバブル景気後の伸び悩み期があったものの、航空運賃の自由化や旅行商品の低価格化でリピーターも増え、団体観光客よりも個人旅行客の割合が多くなり、観光客数が激増した⁽⁶⁾。1992年の首里城公園開園や1993年のNHK大河ドラマ「琉球の風」の放映、1999年の映画「ナビィの恋」(中江裕司監督)のヒット、Beginや安室奈美恵などの沖縄出身のアーティストの活躍などがそれを後押しする形となり、沖縄の文化や歴史にも注目が集まるようになった⁽⁷⁾。

③2000年以降

2000年代は沖縄人気定着する時期であり、毎年のように入域観光客数の伸びがみられるようになった⁽⁸⁾。2000年

は九州・沖縄サミット首脳会合や、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の世界遺産認定がなされた年であり、沖縄の聖地の一部がパワースポット⁽⁹⁾として観光化され始めたりした(聖地ツーリズムの一種である沖縄のパワースポット観光に関しては、次章で詳述する)。

また、2001年には9.11アメリカ同時多発テロ事件の影響による風評被害を受けたものの、すぐに「だいじょうぶさー沖縄」キャンペーンを実施し、格安ツアーを打ち出すなどして観光客を呼び戻した。同年、NHKドラマ(連続テレビ小説)「ちゅらさん」の放送が開始され、2002年には今なお観光客に人気の高い「沖縄美ら海水族館」がリニューアル・オープンし、翌2003年には那覇空港から首里を結ぶ「ゆいレール」が開業、2004年には米軍跡地の新都心(おもろまち地区)に沖縄型特定免税店「DFSギャラリア・沖縄」がオープンするなど、沖縄県の観光政策はさらに進み、日本における著名なリゾート地としての地位を築いていった。

2010年代に入ると世界的景気低迷や東日本大震災などの影響を受け、再び沖縄観光が危ぶまれたものの、震災と同年の2011年には中国人観光客への数次ビザ発給が開始され、2013年には新石垣空港「南ぬ島石垣空港」の開港、翌2014年には那覇空港「新国際線旅客ターミナルビル」の供用や、那覇港泊ふ頭若狭バース「那覇クルーズターミナル」の供用が開始されるなど、観光促進のための整備もおこなわれていった。また、沖縄の文化や歴史を実地で学べる民泊の修学旅行での需要の高まりや、マングローブを植え、カメを放流するといったエコ・ツアー、あるいは民家で食事をしてその家の人と交流をする日帰りツアー(一種のエスニック・ツアー)など多彩な旅行企画の実施により、入域観光客数は2018年現在、年間約1,000万人(国内客約700万人、外国客約300万人)、同年の観光収入は約7,340億円を超える勢いとなっている⁽¹⁰⁾。

2. 現在の沖縄観光の諸相

ここでは、沖縄観光の多様化する現状に関して、最近特に沖縄の観光ガイドブックや観光関係のTV番組、あるいはインターネットなどで頻繁に扱われるようになった(a)聖地ツーリズム(パワースポット観光)、および(b)リゾート・ウェディング・ツーリズムの2つを取り上げ、その状況をみていく⁽¹¹⁾。

(a) 聖地ツーリズム(パワースポット観光)

沖縄は美しい海などの自然と暖かい気候、独自の風土や衣食住、信仰などの文化をもつため、県外の人々はいわば「非日常性」的な体験を求めに沖縄へ行くと考えられる。リゾート地沖縄で、シマ時間や人情味などに癒されリフレッシュしたいという願望は、沖縄の聖地であるガマ(洞窟)やウタキ(御嶽)へも、観光客を誘い込む。

鍾乳洞であるガマの一部は、沖縄では神の住む神聖な場所と考えられてきた。そのガマ(洞窟)が、最近では古酒づくりや瞑想、カフェ、音楽会、結婚式、各種パーティや会議など、多様な催しがおこなわれる場所となっている。また、神の依代とされるクバの木が茂るウタキ(御嶽)は、姉妹の兄弟に対する霊的優越を示す「おなり神」信仰を背景に、神女だけが入れる場所であった。だが、今やその一部はパワースポットとして観光客が訪問するところとなっている。例えば、沖縄本島最北端の辺戸岬には、アスムイウタキ(安須森御嶽)とよばれる古くからの聖地がある。そのウタキ(御嶽)を含む大石林山一帯では、ここ数年来、沖縄本島南部でテーマパーク「おきなわワールド」を運営する株式会社南都によりパワースポット・ツアーやスピリチュアル・ツアーが開催され、多数の観光客で賑わっている。

また、世界遺産セーファーウタキ(斎場御嶽)を抱える沖縄本島南部の南城市では、地元の文化資源としてこのウタキ(御嶽)に注目し、一種のパワースポットとして活用する方策を取っている。具体的には、次のような伝統をもとに、新たなスポーツイベントを開催したりしている。沖縄には、アガリウマーイ(東御廻り)とよばれる聖地巡拝の慣習がある。これは琉球開闢の神アマミキヨの伝説にもとづく聖地に、歴代の琉球国王が国の繁栄と豊穡を感謝して巡拝したことがその始まりとされる。巡拝地はセーファーウタキ(斎場御嶽)をはじめ、本島南東部に点在する聖地である。南城市は現在、このアガリウマーイ(東御廻り)の現代版として、聖地を自転車や徒歩で巡るスポーツイベント「ecoスピリットライド&ウォークin南城市」を、沖縄タイムス社の協力を得て毎年開催している。このイベントは、外部者に向けて「霊威の高いパワースポット、南城市」というイメージを創出する一方で、南城市の人々にとっては自らが霊威の高い場所の出身であるというアイデンティティを形成する契機ともなっている。また、巡るにふさわしい聖地の選

定が地元の人々の間で協議されるなど、聖地の観光化を通じた再帰的な「沖縄化」の進行もみられる。

このように、パワースポット観光を含む聖地ツーリズムは、観光客および地元の人双方にとり、その土地の文化の理解や再認識を促す契機にもなる。しかし、その一方で、聖地を外部に開くことは、観光客が多く訪れすぎるというオーバーツーリズムや、観光客の無理解によるマナー違反行動など、多くの問題を生むことにも繋がる⁽¹²⁾。

(b) リゾート・ウェディング・ツーリズム

沖縄では最近、新しい観光形態のひとつとして、リゾート・ウェディングに力を入れ始めている。沖縄県観光振興課は、沖縄リゾートウェディングを「県外及び海外に在住する新郎新婦が、沖縄でウェディングを挙げることを目的に来県し行うウェディングのこと」と定義している⁽¹³⁾。同課の2019年6月4日の報告書⁽¹⁴⁾によれば、2018年度は年間17,115組の沖縄リゾートウェディングがあり、そのうち挙式に関しては国内が64%、海外が83%、フォト割合は国内が36%、海外が17%とのことだった。また、沖縄ではチャペルウェディングが人気で、フォトウェディングも年々増加傾向にあるという。

同報告書では、「国内市場が前年並みを維持した要因としては、「少子化」や「ナシ婚」といった市場の縮小があるものの、海が見えるチャペルでの挙式の人気が高いこと、ビーチなど沖縄の自然の中で撮影するロケーションフォト（フォトウェディング）の人気が高まっていることに加え、ビーチウェディング、レストランウェディング、琉装ウェディングといった多様な選択肢があるため」だと分析している。そして、「リゾートウェディング地として海外を検討していた層が、参列者のことを考え「身近でパスポートなしで行けるリゾート地」として沖縄を選択していることも実施組数を維持した要因」と言っている。

海外は香港市場が前年と比較し減となったが、台湾、中国、韓国では前年を上回っており、中国市場については前年比150%の伸びを見せているとのことである。リーガルウェディングがおこなわれるようになったことも、海外の人々が沖縄で挙式を望む要因と考えられる。リーガルウェディングとは、海外で現地の法律に基づいて挙式をすることであり、国によって条件・形式が異なるが、香港はその方式が認められているので、沖縄での挙式を希望する人が多いのだという。

さらに、同報告書によれば、沖縄リゾート・ウェディングの地位向上と発展を目的に、県内事業者がこれまで各事業者でおこなっていた誘致活動などを共同で行うため、2011年4月、ブライダル事業者を中心に「沖縄リゾートウェディング協会」が設立され、2013年8月に正式に一般社団法人となったとある。そして、毎月22日は「沖縄リゾートウェディングの日」としてカップルを那覇空港で出迎えるセレモニーを開催したり、「沖縄リゾートウェディングフェア」や「沖縄リゾートウェディングフォトコンテスト」などを委員会を組織して実施したりしているとのことである。

沖縄でのウェディングは、海辺を活用した砂浜ウェディングや、ダイビングの好きなカップルによる海中ウェディング、離島を活用した無人島ウェディング、あるいは世界遺産（城跡）やテーマパーク、水族館、洞窟などを活用したウェディングなど、多彩である。なかには沖縄の伝統衣装を着た琉球ウェディングや、沖縄の食べ物・食材を用いた披露宴の実施など、沖縄の自然のみならず文化も活用した企画もみられる。

沖縄を訪れる観光客にとって大きな魅力と映っているのは、美しい海をはじめとする自然や暖かい気候、そして独特と映る歴史や文化である。最近ではそのような沖縄に憧れをもつ県外の人々が、旅行はもちろん、リゾート・ウェディングや移住、ひいては葬儀や供養も沖縄でおこないたいと希望し始めている。結婚式も葬式も人生儀礼（通過儀礼）のひとつであり、「憧れの場所を旅行したい→憧れの場所で結婚したい→憧れの場所で暮らしたい（移住したい）→憧れの場所で死にたい」といった流れのなか、沖縄リゾート・ウェディングのみならず、沖縄リゾート・エンディングとよぶべき人生の終活のためのツーリズムの出現がみられるようになった。これは、出身地でも居住地でもない土地を死に場所として選定することを意味するが、このようなツーリズムはそれを選択した死者の満足だけでなく、その遺族である家族や親族、ひいては子孫も、死者供養を兼ねたリゾート観光ができて喜ぶことを想定し、実施されている。次章では、このような新たなニーズに応じて出現した沖縄でのエンディング・ツーリズムについて、具体例を挙げながら述べていく。

3. 沖縄におけるエンディング・ツーリズムの実際

前章で述べたように、沖縄への旅行客をさらに増やすことに繋がるであろう沖縄でのエンディング・ツアーは、現在どのようにおこなわれているのだろうか。ここでは筆者自身がおこなったインタビューや参与観察、および資料からその実際を明らかにする。

〈事例1〉2015年8月23日 沖縄県メモリアル整備協会へのインタビューより

公益財団法人沖縄県メモリアル整備協会は、1994(平成6)年に設立された⁽¹⁵⁾。

今年(2015年)は11月8日に沖縄エンディング・ツアーが開催されるが、これは3回目の模擬葬儀となる。今後は年2回(4月や11月)に行う予定である。本当は10月がベストなので、10月になるかもしれない。これまで開催された1回目(図1・表1)と2回目(表2)のツアーは、資料の通りである。

1回目は東京と大阪で4万円位のツアーを企画した。格安航空券だと羽田-那覇間が往復2万円位で自分たちが企画したツアー代より安いとわかったため、3回目からは現地集合、現地解散にした。最初は本土向けにツアーを企画したが、今は県内外から問い合わせが来ており、県内の人からの問い合わせも多い。その理由は、墓を継承する息子に迷惑をかけたくない、夫の墓に入りたくないというのが目立ち、女性が多いが男性もいる。墓は独立して検討したい、または墓にはこだわらないという人もいるので、期限付きの墓もあると紹介している。管理型公園に入りたい人も多い。

本土の方は離島や石垣・宮古島の海を希望する人が多い。石垣島でスキューバ・ダイビングをしたからそこしようなど、思い入れのあるところで散骨したが。一方、沖縄の方はこだわりがなく、(沖縄)本島でも海に撒いてくれればよいという考えの人が多く。

今度の模擬葬儀は那覇発40~50分の場所にある渡嘉敷島でおこなう。塩をお骨に見立てて溶ける紙袋に入れ、その後花びらを撒く。撒く場所は、魚の養殖などのおこなわれていない、人目につかない沖合の離れた所に行っている。海洋散骨はその専門業者に依頼している。海洋散骨などのニーズは宮古・石垣島にある。石垣島では来年春に霊園もできる。

本協会では海洋散骨と永代供養のセットを扱う。海洋散骨のみだと、業者さん(泊の近くにある会社)を紹介する。海洋散骨では、全てパウダーにして半分は海へ撒き、残る半分は永代供養施設に入れる。礎(墓石)に名前を彫刻し、月一回は僧侶を呼んで供養する。

筆者は実際に同協会が実施するエンディング・ツアーへの参加を試みたものの、どうしても日程が合わずにその機会を逃した。そこで、筆者にとり地理的にも参加しやすい東京で海洋散骨を長年手掛けてきた企業、株式会社ハウススポーツクラブによる模擬の海洋散骨クルーズを体験することとした。当企業はもともと観光やパーティ用のクルーザーを運航していたが、代表取締役社長の村田ますみ氏のお母様が沖縄の伊江島の海が好きで、よくそこで夫婦でス



図1 エンディング・ツアーのポスター

表1 エンディング・ツアー行程表①

オキナワン・ライフエンディングステージ 見学ツアー

日時	時間	行程	食事	宿泊
12月1日 (月)	12:00頃	羽田空港午前便発～那覇空港着、専用車にて出発	×	那覇市内
	12:30頃	奥武島近くの「かりゆし食堂」で昼食		
	13:45頃	①沖縄県メモリアル整備協会による、海洋散骨模擬体験～(奥武島2時間)	×	
	15:45頃	帰港		
	16:15頃	②奥武島発、沖縄平和祈念公園へ 沖縄平和祈念公園到着後、平和の礎見学/平和祈念資料館等を観覧 ※観覧料:大人¥300 ※常設展示室への入室は16時30までとなります。	×	
	18:30頃	ホテル到着(ホテルニューおきなわ)		
	19:30	ホテルチェックイン後、ツアー参加者並びに地元関係者による懇親会 場所:琉球Dining ちゅらちゅら那覇国際通り店(徒歩約1分) ※懇親会費用:お一人様¥2,980(税込み)		
12月2日 (火)	07:00	ホテルにて朝食	朝食	那覇市内
	08:30	ホテル発、専用車にて中城メモリアルパークへ		
	09:30頃	③中城メモリアルパーク見学(約2時間) 県内最大級の管理型公園墓地、歴史ロマンにあふれる丘陵地に広がり太平洋を見渡す雄大なロケーション。 見学後、ホテル オリオン モトブ リゾート&スパへ		
	12:15頃	ホテル オリオン モトブ リゾート&スパにて昼食	昼食	
	13:30頃	昼食後、各自にて海洋博公園でお楽しみ下さい。 ※入園料:無料 入場料:美ら海水族館¥1,660 (入場料はホテル内ツアーデスクにてご購入下さい。) ホテル オリオン モトブ リゾート&スパ出発～ホテルへ		
	16:00頃	ホテル到着(ホテルニューおきなわ)		
	18:00頃			
12月3日 (月)		ホテルにて朝食 ～終日フリータイム～ ※オプションにてレンタカー・ゴルフ・体験ダイビング等などもお受け致します。 那覇空港発、午前便又は午後便にて羽田空港出発 =お疲れ様でした=	朝食	

※上記のスケジュールは現地状況・交通事情によりスケジュールが変更となる場合がございます。

●宿泊

1・2日目	ホテルニューおきなわ	住所:那覇市松尾1丁目4番5号	TEL:098-867-7200
-------	------------	-----------------	------------------

表2 エンディング・ツアー行程表②

第2回 沖縄終活体験ツアー工程表

2015年4月20日(月)～4月22日(水) 2泊3日

目的地:那覇市内3日間

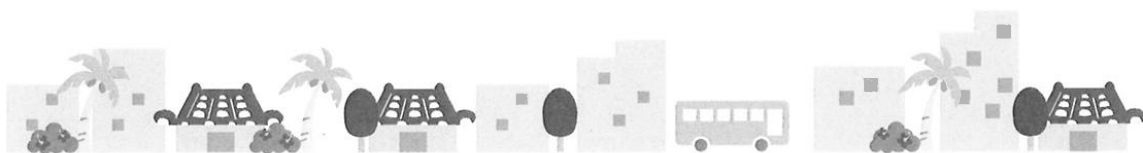
日付	時間	行程	食事	宿泊
4月20日(月)	12:30頃 13:00頃 15:00頃	<ul style="list-style-type: none"> ●羽田空港発(8:25発-11:00着) ●関西空港発(9:00発-11:15着) ●伊丹空港発(9:10発-11:15着) 那覇空港着 ↓ 各自で昼食 ↓ 那覇泊港出発 ↓ 海洋散骨模擬体験(約2時間) ↓ 模擬体験後、希望者は霊園へご案内 ↓ ホテル着		ホテルニューおきなわ
4月21日(火)		終日フリー ※オプションツアーを準備中	朝食のみ	ホテルニューおきなわ
4月22日(水)		出発までフリー ※オプションツアーを準備中 ホテル発 ↓ 那覇空港発 <ul style="list-style-type: none"> ●羽田空港行(18:35発-20:50着) ●関西空港行(17:45発-19:40着) ●伊丹空港行(18:10発-20:05着) お疲れ様でした	朝食のみ	

※悪天候で船が出港できない場合はツアーの日程が変更になる場合がございます。ご了承下さい。

✿**宿泊**

1・2日目 ホテルニューおきなわ

住所：那覇市松尾1丁目4番5号 / TEL：098-867-7200



キューバ・ダイビングをしていたため、死後は伊江島の海に散骨してほしいと希望をおっしゃり亡くなった。その願いを叶えたことが契機となり、2007年からエンディング事業を開始したとのことだった⁽¹⁶⁾。村田氏によれば、初年度は6件のスタートで、2015年には240件、2016年11月末まで249件の依頼があり、これまでに1000人近い人を送ってきたとのことであった。本企業はまた、江東区の事務所に老後や認知症、死などに関して話し合い助け合うためのカフェを開き、入棺体験や認知症の人々に対するワークなどの活動も積極的におこなっている。

次に、〈事例2〉として実際の海洋散骨クルーズ体験の様子を紹介する。

〈事例2〉2016年12月10日 ハウスボートクラブの海洋散骨クルーズ体験より

船長から、模擬葬儀は約1時間おこなわれ、途中ひき波で揺れることがあるから注意するようにとの話が最初にあった。また、ルートは、朝潮小型船乗り場(勝どき栈橋)→レインボーブリッジ→京浜運河(お別れ会)→羽田沖→散骨ポイント(塩と貝殻がお骨の代わりで、花も撒く)→朝潮小型船乗り場(勝どき栈橋)へ戻るということだった。

参加者は60代後半～70代くらいの母親(本来は山への埋葬を希望したが、希望の山がダメだったので、海でもいいかなと思いついた)とその娘、20～30代の僧侶(自身の勉強のため。うちの寺には一般的にいわれる墓がなく、納骨棚を作った。一年間預かり、その後散骨する人と納骨堂に入る人がいる。海洋散骨が檀家に勧められるか見学に来た)と60～70代くらいの母親、行政書士の男性(墓じまいの絡みの勉強のため。親の余った骨をどうするか、子供が困っている等の相談を受けることがあり参加)、40代の女性納棺士(ケアマネージャーをしており、エンディング産業展でハウスボートクラブのブースが近かったので来た)とその夫、40～60代の女性2人(百貨店勤務でお得意様のためのセミナーや体験を企画しているので、その勉強のために参加)、母親と娘2人、大学院生(女性、埋葬研究のため)、筆者の計13人だった。

船長によれば、一艘につき定員40人だが、24人まで乗せる。一日3～4回出航することもあるし、定員オーバーの場合は別の船をチャーターしてもらうこともある。今まで多い時には100人の乗船希望があり、別の船を一艘チャーターしたこともあった。合同乗船は限定5組で、月2回おこなっているが、4月から月3回に増やす予定。その時は祭壇は作らない。船内の思い出コーナーでは、亡くなった方の好きなものを並べることができ、葬法は仏式でも何でもできる。羽田飛行場やお台場、東京ディズニーランドなど、ランドマークの見える場所で船を止めて散骨するとのことだった。

社長の村田氏による説明を次に紹介する。

この海洋散骨では散骨証明書といい、緯度、経度を書いたものを渡す。これを持ち、メモリアルクルーズ、すなわち海のお墓参りをおこなえば、散骨した地点で祈ることができる。メモリアルクルーズには17万円かかるが、それでは高価なため、決まった日に合同でおこなうことにより1人5000円と手頃になる。年間14回、だいたい春と秋の2回(御彼岸、御盆に)実施する。散骨した日にちが違って、同じ場所で埋葬したということで同乗した人たちは仲良くなる。

海洋散骨に関して、法的なことは今のところどこかへの届け出の必要はない。戦後、墓地埋葬に関する法ができたが、改正できておらず、現状に追いついていない。散骨は遺骨遺棄とはしない。自分たちは4年前に日本散骨海洋協会をつくり、マナーなどの普及を推進している。ペットの散骨もOKで、基本的に船をチャーターしてもらう。人間とワンちゃんとの遺骨を混ぜてほしいという依頼もあった。過去に人間とペットと合同の供養を企画した時もあったが、色々な考え方の人もいたのでやめた。ペットの粉骨も3万円ほどかかる。手作業でやるので人間と一緒にできない。

最近増えているのが手元供養で、240万円をかけてお骨をもとにダイヤモンドのように作るものもある。これはスイスに依頼し、最終的にはペンダントにする。お金をかけるところが依然と比べて変わってきた。写真立ての後ろにお骨を入れるものもできている。遺言ではお骨は全て海にと言われるが、7割の人が手元にお骨を残し、何かしらの手元供養をしている。

続いて、海洋散骨クルーズ体験のタイムスケジュールを次頁に示す(表3)。

表3 ハウスボートクラブの海洋散骨クルーズ体験・スケジュール (2016年12月10日)

13:40	献花…ランの花を遺影に一人ずつ、祭壇に供す(写真1参照)。
13:50	おくり鳩…鳩の形に形状記憶させた水溶性の紙にメッセージを書いて棺の中に入れる(写真2参照)。
14:20～14:40	海洋散骨体験…おくり鳩と花びらを海へ撒く。下のデッキからなるべく海に近づけて入れる(写真3・4参照)。 黙祷。鐘を10回鳴らす。再度黙祷。3回船が回る。 テレビ番組「なないろティーチャー」を観る(山田邦子が出演する入棺体験、遺影撮影などに関する番組)。 船乗り場近くで果物の共食(いつもは食事をするとのこと)。
15:15	朝潮小型船乗り場(勝どき桟橋)到着・解散。



写真1 海洋散骨体験クルーズの祭壇

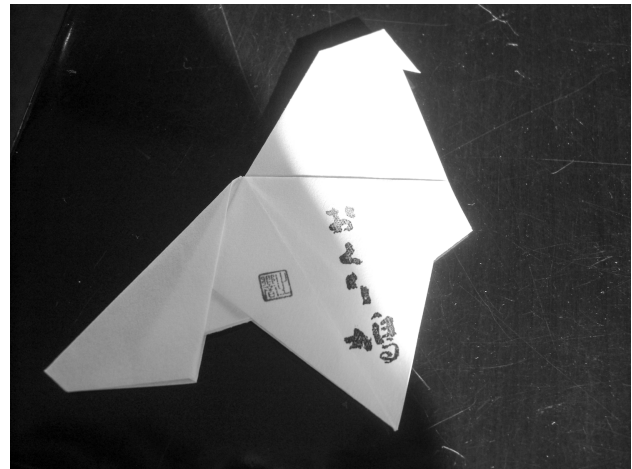


写真2 おくり鳩(メッセージカード)



写真3 海に撒くもの(花、おくり鳩、お骨の代わりの塩)



写真4 海洋散骨風景(模擬)

今度は、いただいた資料をもとに、実際に沖縄でおこなわれた海洋散骨葬のやりかたをみていく。

〈事例3〉2008年5月6日～10日 「故Rさんを偲ぶ旅」(沖縄での実施)より

本葬儀は、東京にある企業が企画した沖縄エンディング・ツアーである。これは事例1や2で紹介したような模擬葬ではなく、実際の葬儀のためのツアーであった。その行程を次に示す(表4)。

表4 沖縄での「故Rさんを偲ぶ旅」のスケジュール(2008年5月6日～10日)

5月6日(火) 前乗り日	
15:15	集合(ANAは羽田空港第2ターミナルビルです。)
15:50	羽田発(ANA131) 一路沖縄へ
18:25	沖縄着 Aさんがお出迎えます。宿泊先へ車移動。
19:00	宿泊先の沖縄ハーバービューに到着。
20:00	夕食 のんびりとお部屋でくつろいで頂きまして、お腹がすいた頃に国際通りへ繰り出して酔っ払いましょう。 (20時に美味しい沖縄料理の店を〇名で予約してます。)
5月7日(水) 1日目	
13:00	羽田発(ANA129) *各自チェックインをお願いします。 一路沖縄へ
15:35	沖縄着 *到着口Bを出られたロビーにてお出迎え致します。 専用車にて宿泊先へ移動。(高速道路で約1時間)
17:00	宿泊先の喜瀬別邸に到着。
19:00	夕食 のんびりとお部屋でくつろいで頂きまして、お宿の個室で和食の御夕食です。
5月8日(木) 2日目	
07:00～10:30	朝食バイキングをお楽しみください。
11:00	喜瀬別邸出発。専用車にて那覇港へ ニライカナイ……沖縄には海の向こうのニライカナイ伝説があります。神々の国であり、死後の世界でもあるのです。沖縄は人類の歴史からみても古く、私達の命のルーツがあるのかもしれない。海から世界へ、そして大自然への旅立ち自由な世界です。海は生命の故郷、生命が生まれて、また還っていく場所です。
12:00	那覇港到着後、専用クルーザーで散骨スポットへ(全行程約2時間) 約30～40分で沖合いの綺麗な海のスポットに到着します。
12:40	故Rさんの思い出の曲を聴きながら…… スペシャル! YダイバーとNダイバーによってお骨を海へ戻して頂きます。お二人のダイバーが上がってきたら、船上でランチBOXとワインを片手に今撮影した海の中のビデオを見ながら、思い出話に花を咲かせましょう。さわやかな風を感じながら少しクルーズを楽しんで頂きながら帰航の途へつきます。
14:00	那覇港着
15:00	那覇市内のDFSに立ち寄って、ちょっとお買い物しましょう。
17:00	DFS出発
17:30	夕食 那覇市内の琉球魅力を感じられる場所で舌鼓。 元アメリカ領事館の建物を改装した(PAZZ HOUSE)で洋食とワインを楽しみましょう。
19:30	那覇市内出発
20:30	喜瀬別邸HOTEL & SPA 到着 一日お疲れさまでした。今宵まだ楽しみたい方はジャグジーやBARで語りましょう
5月9日(金) 3日目	
07:00～10:30	朝食バイキングをお楽しみください。 朝食後、宿でのんびりと過ごすのもいいですし、行動派の人はドライブがてら観光をしましょう。リクエストにお答えいたします。たとえば…… ・古宇利島と大橋 ホテルより1時間10分 海と橋がきれい ・備瀬の並木道(フクギ) 水族館近く 1時間 ・慶佐次マングローブ ホテルより1時間20分 ・マイナスイオン感じる喫茶店めぐり ホテルより40分 ・今帰仁城跡 世界遺産 40分 ・伊江島(フェリー移動) ゆり祭 など
19:00	宿にて夕食

5月10日(土)4日目	
07:00～10:30	朝食バイキングをお楽しみください。
11:00	チェックアウト 喜瀬別邸HOTEL & SPA 出発
12:00	国際通りで昼食と散策(自由行動) お荷物はそのまま手ぶらで楽しんでください。 *お荷物は空港へ運んで先にチェックインします。 *専用車は返してしまいますので、国際通りからは各自モノレールかタクシーで空港までお願い致します。
15:15	那覇空ANA 出発ロビー集合
16:00	那覇発(ANA130) 一路東京へ
18:20羽田着	到着後解散になります。
お疲れさまでした。故Rさんとても喜んでいらっしゃると思います。ありがとうございました。	

以上、事例1～3まで、沖縄をはじめとするエンディング・ツアーの様相をみてきた。〈事例1〉に関しては、近年の死の自己決定権の普及に伴い、2014年より沖縄でのエンディング・ツアーが公益財団法人沖縄県メモリアル整備協会により企画され、海にパウダー状にした遺骨をまく海洋散骨の模擬葬が実施された。当協会は海洋散骨だけではなく、遺骨の半分は霊廟に納め、永代供養を行うことを提案している。この企画は、沖縄の海が好きで、子孫に墓の維持管理をさせたくない、あるいは子孫も墓参の折には沖縄でリゾート観光ができて喜ぶと考える県内外の人々から支持を得ているという。

これらの葬儀には「ロハスエンディング しま風(かじ)」や「オキナワンエンディング美(ちゅ)ら海」など、まるで結婚式プランのような名前が付けられ、どのプランも先祖崇拜が盛んで「供養の心 根付く島」である沖縄で最期を迎えることを勧めている。これは、結婚式や移住が叶わなくとも、せめて葬式やその後の供養は沖縄でおこないたいという需要が出現したことを示している。

当事例で紹介した公益財団法人沖縄県メモリアル整備協会は、株式会社リウゼン、株式会社リンク&パートナーズとともに、2015年7月に関東・関西の55歳以上の男女を対象にして「終活」「エンディングノート」などの言葉の認知度、墓の準備状況、沖縄での墓購入、永代供養施設や海洋散骨の興味度などについて、インターネットを用いたアンケートを実施している。その調査結果からは、沖縄での永代供養・海洋散骨・終活視察ツアーのそれぞれについて「検討したい」「とても興味がある」という強い利用意向をもつ層が確実に存在することがわかり、非常に有望な市場が広がっているということが明らかになったという⁽¹⁷⁾。

〈事例2〉では、東京でおこなわれている海洋散骨模擬葬の様子を紹介した。ここでおこなわれていることは、沖縄での海洋散骨葬を考えるうえで、大きなヒントを与えてくれるだろう。というのも、〈事例1〉でのインタビューを経て〈事例2〉の体験をしたことから、筆者には海洋散骨のやり方にはそれほど違いがないと想像されたからである。まずは地上で遺骨をパウダー状にしておき、クルーザーで個人の好きだった場所に行き、パウダー状の遺骨を花や水溶性のメッセージ用紙とともに一部、あるいはすべて撒く。そしてクルーザーのなかで故人の思い出を語り合い、共食し、下船する。それからまたしばらくして、供養(〇回忌)のため海へ出るのである。

〈事例3〉をみると、沖縄での実際の海洋散骨が、いかに観光と結びついているかがうかがえる。それは〈事例1〉の生前のエンディング・ツアーにもみられるものだが、参加者は故人の死を悼みつつも、おいしいものを食べ、DFS(デューティ・フリー・ショップ)に寄り、世界遺産を見学し、国際通りを歩くという、リゾートを満喫できるような企画となっているのである。

このように、現在、沖縄に死に場所を求めるという「死とツーリズムの接合」が起こっている。自らの死を見据えた巡礼のような一人称の生前、そして死後の旅が、沖縄でおこなわれているのである。沖縄(やその海)が人生の最期を迎える死者の聖地として人々に捉えられ始めたということは、セーファーウタキ(斎場御嶽)のある南城市のみならず、沖縄全体の聖地化も、エンディング・ツアーを通して今後促進されていく可能性がある。人々の憧憬地となった

沖縄で、散骨をはじめとする死者供養をおこなうリゾート・エンディング・ツーリズムが新たな観光として出現していることは、インドのヴァラナシではないが、沖縄そのものが聖地化している現象とみなせるかもしれない。

おわりに

近年、伝統的な死生観が揺らぎ、死の尊厳や死の自己決定権が重視されるようになると、自分がどこで死を迎え、どのように葬られ、どこで眠りたいのかを自らの意思をもち考えることが必要だといわれるようになった。それに伴い、自分の出身地や住んでいる場所に関係なく、家族で楽しく旅行した所や自分の好きな土地、懂れている場所などで死後葬られたいと希望する人が現れるようになった。このような人々を対象に、生前から葬法や埋葬地、あるいは散骨地を決めるためのツアー、すなわちエンディング・ツアーが催されるようになった。そしてそのツアーは、それを決めた人が亡くなった後も、遺族や友人により葬儀、あるいは法要などの供養（メモリアルクルーズ）として繰り返し実施される⁽¹⁸⁾。憧れの地のひとつには、旅行先としてはもちろん、退職後に移住を希望する人も多いリゾート地が挙がってくるだろう。様々な制約やしがらみなどから生前は移住することは無理でも、死後にそこで眠りにつきたいという願望が、今やリゾート地へのエンディング・ツアーの人気を押し上げている。

日本での著名なリゾート地のひとつに沖縄があるが、昨今、沖縄県外出身者で沖縄に憧れ、そこで永遠の眠りにつきたいと願う人々が沖縄でのエンディング・ツアーに参加し、海洋散骨の模擬葬を体験、あるいは見晴らしのよい海に見える埋葬地などを訪れている。これは、沖縄の観光が第二次世界大戦直後は慰霊観光という自分の親兄弟や親戚、あるいは友人といった二人称の死を弔うものであったものが、次第に自分とは関係ない他者、すなわち三人称の死を修学旅行での平和学習で学ぶ観光に取って代わり、現在はまた新たに一人称の死、すなわち自らの死のあり方を考え選択する観光が、最近の死生観の変化により出現したと捉えられる。つまり、死に関する哲学的思考を進めたフランスの哲学者、V.ジャンケレヴィッチの言葉を援用すれば、沖縄の死をめぐる観光は、二人称の死から三人称の死へ、そして現在は一人称の死へと変化していると考えられるのである。

【謝辞】

本稿作成にあたり、公益財団法人沖縄県メモリアル整備協会の三木邦子様、株式会社ハウスボートクラブ 代表取締役社長の村田ますみ様とその夫君の村田弘英船長、海洋散骨クルーズ体験の参加者の皆様、イーストホームタウン沖縄株式会社 代表取締役社長の相澤和人様に大変お世話になりました。ここに心からの謝意を表します。

【注】

- (1) エンディング・ツアーは終活ツアーともいわれるが、ここでは後者を「ある人が生前に自分の散骨場所や埋葬場所、葬儀の方法を決めるために参加するツアー」という限定した意味で使用するのに対し、前者をそれプラス「故人が生前取り決めたように遺族や友人が故人を散骨したり埋葬したりするためのツアー」、すなわち「生前だけでなく死後もおこなわれるツアー」という、より広い意味で使用することとする。
- (2) 沖縄県ホームページ「平成30年度入域観光客数及び観光収入等の修正について（令和元年11月26日発表）」（更新日：2019年12月4日）参照。
- (3) V.ジャンケレヴィッチはその著『死』（仲澤紀雄訳・2014 [1978] pp.24-36）において、第三人称、第二人称、第一人称態の死を説明している。それによれば、第三人称の死は、死一般、抽象的で無名の死、平静の原理であり、第一人称の死は疑いもなく苦悶の源泉であり、私のことが問題で、悲劇の主体性、第二人称の死は他者の死と自分自身との死の間にある、父や母の死のような近親の死、ほとんどわれわれの死のようなもの、我々の死とほとんどおなじだけ胸を引き裂くものであるという。
- (4) 沖縄県「I 沖縄観光の概要」の「1 沖縄観光の推移 (2) 主なトピックス (年代別)」や多田『沖縄イメージの誕生－青い海のカルチュラル・スタディーズ－』（2004 p.33）、『沖縄イメージを旅する』（2008 p.156, p.196）の表を参考に、筆者がテーマに合わせてまとめなおした。
- (5) 末永「沖縄イメージと風景・身体・記憶〈中〉シーサー」琉球新報 2006.8.30 文化 (14) 参照。
- (6) 宮城「沖縄県ホテル業の発展と現状－訪問客の視点を通して」『社会システム研究』第21号 (2010 p.244) によれば、「リピート率の増加により、団体旅行の割合が1991年の44.7%から、2006年には18.5%に減少し、個人旅行の割合が32.1%、フリープラン型バック旅行は41.2%と増加している」と述べ、1980年代までの旅行形態は団体旅行がメインであったが、それが個人旅行に変化したと指摘している。
- (7) 原「おきなわブーム」『沖縄民俗辞典』（2008 pp.97-98）によれば、1980年代末から2000年代はじめにかけては、料理・ファッション・雑貨・音楽などのジャンルでエスニック・ブームやワールド・ミュージックブームがおこっており、その文脈で沖縄のポピュラー文化や伝統文化が注目されるようになったとのことである。

- (8) 沖縄県ホームページ 表「入域観光客数と観光収入の推移」(「1 沖縄観光の推移 (1) 概況 (年度)」) 参照。
- (9) パワースポットとは神社はもちろん、気、風水、大地の力が感じられる所を指すこともある。婚活・恋愛の聖地といった新しい意味が以前からある神社に付与されたり、アニメの聖地などのように、従来は聖地ではなかった場所が新たに聖地化されたりする場合もある。このようなパワースポット・ブームは女性誌からはじまり、メディア・旅行者など外部者がそのイメージを作り上げたといわれる(塩月 2015 pp.773-774 参照)。
- (10) 前掲注 (2) 参照。
- (11) その他、最近では旅行会社などにより、沖縄はチーム力・仲間意識を育てるための社員研修、すなわちチームビルディング・ツーリズムの場としても最適ということが盛んに宣伝されている。例えば、沖縄美ら海水族館でのパーティや古民家パーティ、鍾乳洞でのシークレットパーティ、ビーチパーティ、プールサイドパーティなど、場所を重視した企画を打ち出したり、離島などでおこなうビーチオリンピック、読谷村にあるNHK大河ドラマで使用されたセットを用いたテーマパーク「むら咲村」での琉球王朝時代のクイズなどをおこなう「ワクワク体験サスペンスinむら咲村」、自然と人間の調和を目指し17世紀琉球王国の宝探しやものづくりをおこなう「森の守り神を探せ!」など、体験重視の企画も考えられていたりしている。また、ビーチクリーンアップやマングローブの植樹など、社会貢献を重視した企画もあり、個人旅行だけではなく沖縄観光を売り出し始めている。
- (12) イベントなどを通して聖地を外部に開くことは、①ウタキ(御嶽)信仰の理解の難しさ、②ノロ(神女)とユタ(民間巫者)の区別の難しさ、③観光客数の増大による環境悪化、④拝み方の変化の強制(世界遺産認定後は入場料が必要となる、ウチカビ(紙銭)に火をつけてはならないとされるなど)という問題を生じさせた。これらを解決するには、女性の宗教的優越性という伝統に則り、女性のみ聖地に入れるようにする、あるいは「ウトゥーシ」(お通し)とよばれる宗教的中継観念を地元の人が祈る際に活用するなど、その民俗に伝承されてきた知恵(民俗知)を援用することが有効であろう。聖地を観光化により開くことのメリットとデメリットに関しては、塩月2012、塩月他 2012参照。
- (13) 沖縄県観光振興課が作成した報告書(「Be.Okinawa 平成30年[年間]沖縄リゾートウエディング 17,115組」)参照。
- (14) 前掲注 (13) 参照。
- (15) 公益財団法人沖縄県メモリアル整備協会の設立と手がけてきた事業に関しては、当財団ホームページ「沖縄県メモリアル整備協会の歩み」を参照。
- (16) インタビューでも聴いたが、本人の著作にもそのことが詳しく書かれている(村田 2013 p.12-29参照)。
- (17) 株式会社リウゼン、公益財団法人沖縄県メモリアル整備協会、株式会社リンク&パートナーズ2015年2月『WEB調査 県外における「終活」に関するアンケート調査報告書』参照。
- (18) これは故人が死後、遺族や友人、あるいは子孫に何かを渡していくという、井上の指摘する「死後のしかけ」と捉えることができる(井上 2017 p.78)。

【参考文献】

- ・井上治代 2017「第三章 死生観なき時代の死の受容—スピリチュアルケアとしての先祖祭祀から自然・墓友へ—」浅見昇吾編『「終活」を考える—自分らしい生と死の探求』pp.53-82 上智大学出版
- ・塩月亮子 2012『沖縄シャーマニズムの近代』森話社
- ・塩月亮子・丹野忠晋・渡辺律子 2012「沖縄の世界遺産と観光—聖地を用いたスポーツイベントの事例から—」『跡見学園女子大学観光マネジメント学科紀要』第2号 pp.35-49
- ・塩月亮子 2015「開かれる聖地—沖縄宗教文化の観光活用をめぐる—」鈴木正崇編『森羅万象のささやき 民俗宗教研究の諸相』pp.773-792 風響社
- ・V.ジャンケレヴィッチ 2014 [1978]『死』(仲澤紀雄訳) みすず書房
- ・末永航 2006.8.30「沖縄イメージと風景・身体・記憶(中) シーサー」琉球新報 文化 (14)
- ・多田治 2004『沖縄イメージの誕生—青い海のカルチュラル・スタディーズ—』東洋経済新報社
- ・多田治 2008『沖縄イメージを旅する』中公新書
- ・原知章 2008「おきなわブーム」渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也編『沖縄民俗辞典』pp.97-98 吉川弘文館
- ・宮城博文 2010「沖縄県ホテル業の発展と現状—訪問客の視点を通して—」『社会システム研究』第21号 pp.229-252
- ・村田ますみ 2013『お墓に入りたくない! 散骨という選択』朝日新聞出版

【参考サイト】

- ・沖縄県「平成30年度入域観光客数及び観光収入等の修正について(令和元年11月26日発表)」(更新日:2019年12月4日) <https://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/kankoseisaku/kikaku/statistics/tourists/h30-nendo-syuusei-tourists.html> (閲覧日:2020年1月8日)
- ・沖縄県「I 沖縄観光の概要」の「1 沖縄観光の推移 (1) 概況 (年度)」<file:///C:/Users/User/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/IED92J81/h26-i.pdf> (閲覧日:2020年1月8日)
- ・沖縄県「I 沖縄観光の概要」の「1 沖縄観光の推移 (2) 主なトピックス (年代別)」<file:///C:/Users/User/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/IED92J81/h26-i.pdf> (閲覧日:2020年1月8日)
- ・沖縄県観光振興課「Be.Okinawa 平成30年[年間]沖縄リゾートウエディング 17,115組」file:///C:/Users/User/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/FZJ4IQ35/h30_1-12_rw.pdf (閲覧日2020年1月8日)

- ・株式会社リウゼン、公益財団法人沖縄県メモリアル整備協会、株式会社リンク&パートナーズ 2015年2月『WEB調査 県外における「終活」に関するアンケート調査報告書』file:///C:/Users/User/Desktop/Okinawa_Syukatsu_research201407.pdf (閲覧日：2019年3月1日)
- ・公益財団法人沖縄県メモリアル整備協会「沖縄県メモリアル整備協会の歩み」<https://oki-memorial.org/foundation/history> (閲覧日：2020年1月9日)